新木秀和著

『先住民運動と多民族国家——エクアドルの事例研究を中心に——』

御茶の水書房　2014年　xi＋337ページ

宮地隆廣（みやち たかひろ）

はじめに

差別と闘う人々を研究することは，過去を反省し，より公正な未来を構想するうえで有意義なことである。同時に，このような研究には，それが正義に関わる事柄を扱うだけに，人が集まる。関心をもつ人が増えれば，より多くの主張が唱えられ，記述する視点も多様化する。その結果，研究の全体像を捉え，新しい知見を示すという，学問を発展させるうえで重要な2つのことが困難となる。

ラテンアメリカの先住民運動研究も同様である。1492年にコロンブスがアメリカ大陸に到達して以来，ラテンアメリカはスペインをはじめとするヨーロッパ諸国の植民地となった。大陸にすでに住んでいた人々は植民地当局に支配され，政治的地位，経済的状況，文化的評価など，あらゆる面で先住民は植民者に対して劣位に置かれた。こうした差別は現在でも残存している。しかし，1970年代末より各国で本格化した先住民運動によって，多くの国の憲法で先住民への尊厳が謳われ，先住民が大統領をはじめ主要な公職を占めるようになるなど，劣位が克服されつつあることも確かである。

目に見える成果を上げてきたラテンアメリカの先住民運動は，多くの人々によって研究されてきた。代表的な研究者であるジャクソン（Jean Jackson）とウォーレン（Kay Warren）は，2005年に発表したレビュー論文で，先住民研究はもはや一大産業であると述べている［Jackson and Warren 2005, 550-551］。この指摘がなされて10年を迎えようとしている現在，先述した2つの難しさはさらに度合いを増しているといえよう。

本書は，この飽和状態にある業界のなかに，ニッチを狙ったものではない。このことは本書の「はじめに」よりうかがうことができる。これによれば，著者がおもな研究対象としてきたエクアドルを中心に，ラテンアメリカ諸国における先住民と国家・社会との関係と，多民族国家の実現に向けた先住民運動の展開を本書は分析する。以下では，本書の内容を紹介したうえで，その特長と課題が表裏一体の関係にあることを述べる。

Ⅰ　本書の内容

本書は3部で構成され，各部には複数の章が設けられている。

第Ⅰ部「先住民運動の展開と多民族国家の形成」では，エクアドル先住民運動の歴史と，運動が実現を求めてきた多民族国家について説明されている。19世紀前半の建国以来，歴代の政府はヨーロッパ文化を基調とした同質的国民の創設を図った。非ヨーロッパ的文化をもち，被植民者として劣位にあった先住民が尊重されることはなかった（第1章）。ところが，20世紀前半より組織化された農民運動を土台に，先住民運動が成長を始めた（第2章）。その存在は，1990年に発生した大規模な抗議行動により，社会に広く知られるようになった。これ以来，先住民運動は政党の結成，1990年代後半における憲法改正の推進，クーデターへの参加など国政に大きな影響を与え続けている（第3章）。そして，現職のコレア（Rafael Correa）政権にて，憲法でエクアドルを多民族国家として定義することや，新自由主義経済政策を廃することなど，運動の主要な要求が実現された。ただし，政権が要求を汲んだことは，先住民組織と協調していることを意味しない。政府与党は先住民運動の一部リーダーを自党に取り込むなどして，組織の分断を図っているからである（第4章）。

上記の過程のなかで，つねに先住民運動の要求の柱であったのが多民族国家の創設である。これは，非先住民である伝統的政治エリートが構想した，

ヨーロッパ文化と混血を基調とする国民の同質化とは異なり，多様な民族がひとつの国家のなかに共存することを目指すものである（第5章）。注目すべきは，多民族国家が抽象的なスローガンではなく，精緻な理念として提案されていることである。とりわけ，エクアドル最大の先住民組織であるエクアドル先住民連合（Confederación de Nacionalidades Indígenas del Ecuador: CONAIE）は多民族国家にまつわる諸概念について明確な定義を示してきた。たとえば，日本語にすれば「民族」と訳せるものを，独自の文化要素を有する先住民集団を指すナシオナリダー（nacionalidad）と，その下位区分であるプエブロ（pueblo）という概念に分け，先住民という集合を階層的に表現している（第6章）。こうした同質的国民国家に対抗する理念を掲げ，抗議や選挙参加など複数の行動を組み合わせつつ，要求を実現してきたことは，運動の一定の成功を意味する（第7章）。

第Ⅱ部「先住民運動の諸相」は，タイトルのとおり，エクアドル先住民およびその運動が関わる多様な問題領域を紹介している。具体的には，貧困と人種差別（第1章），都市空間と地方行政（第2章），異文化間教育（educación intercultural）と先住民の文化的価値に基づいた大学創設の動き（第3章），憲法における先住民言語の位置づけ（第4章），センサスにみられる先住民であることに向けられた差別意識（第5章），先住民が作成した地図とそこから読み取れる意味（第6章），文化遺産・自然遺産の管理（第7章），天然資源開発（第8章），司法と医療（第9章），先住民運動の陰に隠れがちなアフロ系および混血の人々の運動（第10章）が扱われている。なお各章は，演繹的な論理展開のなかに位置づけられるものでも，ある仮説を例証する帰納的役割をもつものでもない。

第Ⅲ部「ラテンアメリカの経験への位置づけ」は，先住民による国際的な運動の展開とラテンアメリカ各国の動向を紹介している。先住民運動が活発になった背景として，国際NGOなど国外から先住民を支援する人々が現れたことが挙げられる。その支援を受けて複数の国にまたがる先住民組織が発足し，それと軌を一にするように，各国での先住民運動の成長も見て取ることができる（第1章）。これらの運動の分析にあたり，多くの先行研究はいわゆる社会運動論を参照しているが，その主たる関心として，動員や組織化の課題，抗議行動の類型などがある（第2章）。最後に，多民族国家に直結するテーマである憲法改正や，いわゆる「善く生きること」（buen vivir/ vivir bien）という概念について，エクアドルとボリビアの例が挙がっている（第3章）。

Ⅱ　特長

本書の最大の特長は，エクアドルの先住民運動を知るための唯一無二の日本語書籍であることに尽きる。著者はエクアドルを扱った理由として，自身のおもな研究対象国であることを挙げるにとどまっている（iiページ）。しかし，ラテンアメリカ全体を見渡した時，エクアドルは本書のように大きく取り上げられる意義のある国である。

本書冒頭で言及されているとおり，ラテンアメリカにおいて先住民がその政治的存在感を広く顕示するようになったのは1990年代前半，とくにコロンブスのアメリカ到来500周年にあたる1992年前後からである。同年にグアテマラの先住民活動家メンチュウ（Rigoberta Menchú）がノーベル平和賞を受け，1994年にメキシコでサパティスタ民族解放軍（Ejército Zapatista de Liberación Nacional: EZLN）の蜂起が発生したことは，ラテンアメリカを専門としない人々にもよく知られている。エクアドルには，メンチュウのように国際的に注目を集めた人物も，EZLNのように世界に向けて自らの反体制性を力強く発信した団体もない。しかし，先住民が政権を争う政治勢力に成長したことはエクアドルで最初にみられた。ラテンアメリカ諸国では1970年代末より政治体制の民主化が進んだが，非先住民が政権を支配するというラテンアメリカ史の鉄則はしばらく揺らがなかった。これを最初に打ち破ったのがエクアドル先住民である。

こうした先駆性をもつエクアドル先住民運動とは何か，そしてその成果と課題は何であるかについて，本書の第Ⅰ部は歴史的に，第Ⅱ部はテーマ別に情報を整理している。第Ⅰ部を読めば，先住民運動の発展について読者は基本的な知識を押さえることができる。また，第Ⅱ部で取り上げられた非常に多様なテーマは，第Ⅲ部第3章の「善く生きること」論とともに，いずれも先住民研究の重要な論点であ

る。エクアドルを長年研究してきた著者だからこそ，そのすべてについて同国の状況を書くことができたといえる。今後，エクアドルの民族問題を学ぶ者はまず本書を読み，基礎知識を固めるべきである。また，エクアドルにおもな関心がなくても，民族運動や多文化共生を考える事例としてエクアドルを知るのに，本書は有益であろう。

第2の特長は，著者自身も認めているように，エクアドルにとどまらず，ラテンアメリカ先住民運動の基本的情報を広く掲載していることにある［新木 2014, 90, 92］。冒頭で説明したように，ラテンアメリカ先住民研究は膨大な数に上る。そのすべてを追跡することは，第一線の先住民研究者であっても事実上不可能である。本書の第Ⅲ部は，この非常に手のかかる試みを1人で行った成果である。先住民運動の活発な国のみならず，先住民の人口規模の小さいウルグアイやコスタリカを含めて，ラテンアメリカ諸国の情報がまとめられている。さらに，国のレベルを超えた先住民の国際的連帯についても必要十分な事実が紹介されている。国際的な動向を理解したうえで，各国の状況を知ることができるという意味で，本書はラテンアメリカ先住民運動の全体的な情報を簡便な形で提供しているといえる。

Ⅲ　課題

課題は上記の特長から必然的に導かれる。本書は約270ページの分量に20もの章を設け，非常に多くのテーマを扱っている。そして，大半の紙幅は各テーマに関する先行研究の提示に割かれている。著者は本書を分析の書であると定義するが，分析の出尽くした先住民研究業界にさらなる分析を提案するなら，その独自性が主張されねばならない。問題は，独自性についての説得的な記述が見当たらないことにある。

独自性を示すには先行研究に対する批判が必要である。本書の批判の仕方には特徴があり，いずれも先行研究の事実誤認や論理的矛盾を指摘するのではなく，⑴著者が必要と考えている点に先行研究が及んでいないこと，⑵先行研究の数が少ないことのいずれかを問題視している。本書の独自性が見出せない原因は，これらの批判の仕方にある。

まず，⑴のような範囲不足を指摘する批判については，その不足にいかなる意味があるのかを説明しない限り，理解し難いものとなる。たとえば，先住民運動論と呼べるほどの確固とした理論構築は不十分だとする批判がある（iv, viiページ）。著者は既存の理論が欠けている部分が何であり，その克服によって先住民運動を新しい形で理解できることをわかっていると思われる。このような記述を目にすれば，その中身に期待が寄せられることになるが，その具体的な説明がないまま，本書は終わりを迎える。こうした，何らかの欠落を批判しながら，それがなぜ批判に値するのか，そしてそれを克服するといかなる発見があるかを，裏付けを伴う形で示していない箇所は複数に上る（60, 88, 168, 220, 221, 255ページ）。読者からすれば，批判が突如投げかけられ，それが決着を見ないまま次の話題に移ってしまっているようにみえる。

上記の例について著者は，「いくつかの学問分野の知見を取り入れ」た「総合的な整理」である地域研究のアプローチが本書独自の理論である（iiiページ）と答えるかもしれない。現在の国家を論じるうえで，政治体制論やコーポラティズム論ではみえないエスニシティや文化の側面を多民族国家論で補うべきだという主張は（230〜231ページ），その枠組みを踏まえた具体的な提案といえる。しかし，それによって先行研究にはない新しい知見が示されたわけではなく，「総合的な整理」とは先行研究がすでに明らかにしたことを並記しているに過ぎないのではないかという疑念が拭えない。

また，先行研究が少ないという⑵のタイプの批判は，研究正当化の常套文句である。一般に，こうした批判に対しては，その少ない先行研究に対する論者の姿勢をみることで，独自性の度合いを測ることができる。たとえば，先行研究が乏しいとされるテーマとして，センサスや先住民地図が挙げられている（viページ）。そして，これらのテーマを扱っている第Ⅱ部第5章，第6章および引用されている研究をみると，内容は同一のものとなっている。やはり，本書独自の主張はみえてこないのである。

このように，著者は先行研究に徹底した批判を加えず，その内容を基本的には信頼したうえで，本書を著したといえる。そしてこの忠実さはさらなる別の課題を生み出している。すなわち，自らの議論の流れに反する先行研究を引用している箇所がある。

これは，各章の独立性が高い第Ⅱ部および第Ⅲ部よりも，各章がつながりあってエクアドルの歴史を説明している第Ⅰ部により多くみられる。

たとえば，2001年に発生した先住民蜂起について，それに関する代表的書籍の標題『先住民のためだけではなく』を引用し，先住民運動がエクアドル全体の問題を提起したことがこの時の運動の特徴であるとしている（57～58ページ）。しかし，運動がそれ以前に同様の意識をもっていたことは，著者自身の記述から明らかである。1998年の憲法改正に向け，CONAIEはエクアドルという国のあり方を論じるべく，憲法案を議論する場を設けた（51～53ページ）。また，先住民運動が提案した多民族国家にまつわる諸概念は（第Ⅰ部第6章），エクアドルの社会における先住民の位置づけを考慮せずしては，構想できないものである。このように，論述を組み立てるうえで引用している参考資料の中に，対立する内容があることを著者は意識していないのではないかと思われる記述が散見される。あらゆる学術書の宿命として，本書は今後多くの読者の評価を受けることになるが，先行研究の取り上げ方を再検討することは，本書を批判的に読むひとつの方法となると思われる。

以上より，本書の功績は先住民運動の研究に一定の整理を示した点にあるといえる。そして，その作業に多くの紙幅を割いたために，著者独自の知見を披露することが控えられている。ラテンアメリカ先住民運動に関する著者の知識の広さは，本書によって明らかとなった。その知識を踏まえて本書が投げかけた批判の背後には，深い問題意識があると思われる。それが一体何なのか，著者の本意を知る機会があるならば，著者の論文を欠かさず読み続けてきた評者をはじめ，ラテンアメリカ先住民に関心をもつ人々にとってこのうえなく貴重なことであろう。

文献リスト

〈日本語文献〉

新木秀和 2014.「著者自身による新刊書紹介『先住民運動と多民族国家――エクアドルの事例研究を中心に――』（御茶の水書房，2014年）」『ラテンアメリカ・カリブ研究』21: 88-92.

〈英語文献〉

Jackson, Jean and Kay Warren 2005. “Indigenous Movements in Latin America, 1992-2004: Controversies, Ironies, New Directions.” *Annual Review of Anthropology* 34: 549-573.

（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授）